

緑地帯

私が生まれ育った広島の比治山。その頂上にある展望台からデルタを眺める時、ある種の無常感に襲われることがある。展望台が建設中の1953年秋だった。この場所から街を背景に、母と5歳下の弟と3人で写った1枚の写真が、わが家の写真帳に残っている。私は小学1年生だった。



岡村 有人

緑地帯

比治山とその周辺の街は戦後大きく変わった。平和大通りの東の端を飾るにはあまりにもみすぼろしかった私の記憶にある幅の狭い木造りの鶴見橋。それが広い橋となつて京橋川を渡り、更にその先の比治山をトンネルで突き切つてつながつた。比治山に穴を開けることは私には耐えがたいことだったが、比治山も時代とともにその存在意義を問われている

岡村 有人

私の比治山①

セピア色をしたバラックの家々がモザイク模様のオブジェとして山裾まで広がり、広島復興を鳥瞰するには格好の場所であった。背後にはデルタを囲む山々。何より印象的なのは、カラーではないにもかかわらず、その山の端を境として広島を包む、どこまでも深い青を思わせる秋空だった。

東の終端とする幅広い道は、まだ舗装も植樹もされておらず、緑地帯がこれから完成する道路を青写真のように浮き彫りにしている。バラックが無秩序に描くモノクロームの街並みを大きく割って走るこの未完の道路が、これから起きる一連の復興事業と希望に満ちたイベントを予感させていた。

皆実高、広島大を経て25歳で広島を離れるまで、私はよくこの場所に立った。47年という時によって熟成された故郷は今、心の中ではあの当時の強烈なイメージとして化石と化しているのかもしれない。今たまたま展望台から望む広島湾は街の合間を縫って辛うじて顔を出すにとどまっている。展望台はと言えば、空を射抜く高層ビルに圧倒されて肩身が狭そうだ。

(おかむら・くにと 東京皆実有朋会会長 東京都)

私の比治山②

証しであろう、と無理やり納得した。

1950年代の夏の風物詩が比治山から見た元安川の花火だった。当時は高いビルがないから比治山は格好の観覧席であった。むしろ今では元安川で花火大会を行うこと自体が無理であり、比治山は広島空を望むにはあまりにも低すぎる。そんな市民の身近な憩いの場の役割からバトンを受け継

いだのが、現代美術館やまんが図書館を中心とする新たな「平和の丘構想」なのであろう。

成立しえない。平和記念公園、平和大通り、平和の丘を包括する企画こそが平和都市広島をいっそう魅力的なものにし、この街の世界に向けた発信力を増すであろう。

も見事に整備されている。だが、私が何度か訪れた折には閑散としていたし、段原地区からの屋外エスカレーターによるアクセスもその役割をほとんど果たせていない。もったいないと思った。

これら建物のその一角は今でも見事に整備されている。だが、私が何度か訪れた折には閑散としていたし、段原地区からの屋外エスカレーターによるアクセスもその役割をほとんど果たせていない。もったいないと思った。

平和の丘構想は比治山単独では

平和の丘構想は比治山単独では

(東京皆実有朋会会長 東京都)

緑地帯

爆心から1・6キロの昭和町で被爆した両親は九死に一生を得た後、親戚知人の家を転々とする戦後数年であったが、幸運にも比治山の麓に土地を見つけた。市内でありながら、北面が山で子どもを育てる環境に恵まれていることが購入の動機であったという。疎開していた母の着物が土地代金の大きな部分を占めた。進駐軍の軍人がドルで買ってくれたのだ。

岡村 有人

これが比治山と、それに抱かれたこの土地が私の故郷になるきっかけであった。山麓に建てたわずか50平方メートルほどの手作りのわが家。両親にとつて被爆から足かけ4年、私が満2歳になった年の家族史に刻まれる一大イベントだったのである。

周りには視野を遮る建物はなく、太陽は東の山の端から出て西の山に沈む。山の端から顔を出す物心つくつと、わが家から少し離れた、雑草が生い茂る原野の先には何かがあるのか、知りたくて仕方なかった。子供の好奇心は大航海時代の冒険心にもつながる本能的なものであろう。

そんな折、比治山の麓を東に行くとちよつとした荒地があった。そこには子供の冒険心をくすぐる比治山からの地下水が湧き出る池や湿地があった。更にその東には貝塚があり、小学校でそのことを習うと発掘隊のまねごとをやってみた。今になって思えば小さな山ではあったが、比治山は子どもたちの冒険心を育み、無限の遊び場を提供してくれた。

(東京皆実有朋会会長 東京都)

緑地帯

学校に上がる頃となれば、もっぱら比治山の自然を相手に冒険だの探検だのと言って遊ぶことが多かった。比治山の南西急斜面の頂上近くには、子どもが何人も乗っかって寝そべることのできる天狗岩があった。子どもたちの秘密の集場所として使われた。

この大岩に座ると広島湾に浮かぶ島々が一望のもとに見渡すことができ、子どもたちは汪洋とし

岡村 有人

た気持ちになった。そこから望む旧市街には、八丁堀の福屋デパートや中国新聞社を中心とするわずかな数のビル以外には目立つ物はなく、一望に鳥瞰できた。春がすみに浮かびあがる島々の段々畑や秋の紅葉は、自然と光が奏でる交響詩でもあった。夏は海からの南風を受けて涼しく、冬は日だまりとなつて暖かかった。

記憶をたどれば、初めて天狗岩

私の比治山④

に座ったのは私が5歳の時。父がその上に座つて本を読んでもくれた時のことだった。以来この岩のことが好きになって、仲間を誘つて秘密基地に仕立てた。岩でできたデッキの下には、大人が十分に立つことができ、雨風をしのげるちよつとくぼんだ部分があった。

そこに身を寄せると、冬には太陽のぬくもりを吸収した岩が冷え切った体を温かく包んでくれた。

この大岩の由来は、硬い岩の上に巨大な爪で引っかいたような痕があったことによる。

その昔、大天狗がこの岩に立ちキックをして宮島までひと跳びした時にできた爪痕であると、子どもたちの間では伝わっていた。広島市の街地にも子どもたちに夢を与えてくれるこんな場所があったのだ。

(東京皆実有朋会会長 東京都)

小さな山にもかかわらず比治山には木々がうっそうと茂っていた。学校が終わると、子どもたちはのこぎりとナイフを持って山に入る。秘密基地を造って、そこで少年探偵団や宝探しの作戦を練るのだ。食べ物も十分でない時代であったが、団塊世代の私たちは空腹を忘れて遊びを創り出し、自然を相手に無心に戯れた。

すごいと思うのは、小さな自然

岡村 有人

を大自然に見立てて遊ぶことのできる子どもの想像力である。当時の比治山はまだ都市と自然が共存する時代の小山であったから、そこに生息する動物も植生も山里をほうふつさせるものがあつた。わが家の裏山には時折イタチが出没して目と目が合うことが往々にしてあつたが、凶暴な性格にもかかわらず愛嬌のあるまなこには、愛着の念を持ったものである。

当時の遊びの中に「六むし」という狭いところでもできる球技があつた。「矢じるし」という遊びもあつた。2チームに分かれて一方が矢印を地面に引きながら逃げて、しばらく時間をおいて、もう一方がこれを追いかけて逃げたチームの所在を当てるといふものもあつた。まだ舗装されていない道だからできたのだが、比治山もその舞台となつた。このように体を

使う遊びは、私たちの体力増進に役立ったとも思える。小学生の頃のもう一つの比治山の思い出と言えば、夏休み早朝のラジオ体操だ。早起きを強いられる、この学校からの宿題は、子どもたちにとって結構厄介者であつたが、自宅から体操広場に着くころには眠気も吹っ飛んで、そこは子どもの社交場と化していた。

(東京皆実有朋会会長 東京都)

比治山が私たち団塊世代の遊び場として定着した頃、この山を市民の憩いの場として取り戻そうという動きがあつた。展望台、登山道、広場などの整備が行われ、今の公園の原型が作られた。その頃にはアメリカによってABC

CC(原爆傷害調査委員会、現在の放射線影響研究所)が建てられ、モダンな「かまぼこ形」は子どもたちにもなじみのあるものになつて

岡村 有人

いた。かまぼこ形は今もその頃のたたずまいで、訪れるとタイムスリップした錯覚を覚える。

比治山には北と南に二つの頂があつて、その形から臥虎山と呼ばれていた時期もあつたと聞く。明治初めにこの南側のこぶを陸軍墓地として整備して以来公園となつたが、ABC

CCを建設するに当たって墓地は移設を迫られた。私の記憶では多分小学2年生の頃からおよそ4〜5年を費やしただろうか。探検ごっこをしていた子どもたちは、掘り返されたおびただしい量の遺骨を自撃した。後日、それは西南戦争から第2次大戦までに亡くなった兵士を弔うものであつたと教わつた。これらの遺骨を再び安置して完成したのが現在の陸軍墓地である。

新たな陸軍墓地は「かまぼこ形」の東側に広島湾を望んで、ひっそりとたたずんでいた。当時、入り口として造作された礼拝堂を兼ねた空間は、此岸と英霊たちが眠る彼岸を仕切る役割を担っていた。これをくぐって墓地に入ると俗世から隔離され、いつ訪ねても落ち着く場所だつた。最近訪ねると、この空間は取り払われて、英霊たちの魂はまだ此岸をさまよっているかのようだった。

(東京皆実有朋会会長 東京都)

緑地帯

比治山の北の広場には戦前、御便殿と呼ばれる建物が立っていたと聞く。原爆で全て灰となり、頑丈な礎石のみが風化して残っていた。この広場は私が広島大在学中、陸上競技の自主トレの場として格好のもので、冬場には毎日のように足を運んだ。だからこそ50年経た今も比治山の隅々まで頭に刻まれている。石組みの礎石の近くに松の根っこが二つ、ちょうどスタ

岡村 有人

ーディングブロック代わりになるようにうまく並んだものがあった。練習に供してくれた。

この思い出の場所に今はまんが図書館が建っている。松の根っこも、もはやない。当時の比治山には車が走れる石畳の登山道が頼山の霊廟がある麓の多聞院から延びていて、途中で二股に分かれて一方はABC C（原爆傷害調査委員会、現在の放射線影響研究所）

私の比治山⑦

に、もう一方は御便殿へと続いてきた。この道を一気に御便殿まで駆け上るのも自主トレのメニューの一つであった。

比治山の自然に包まれて走っていると、敏感に四季を肌で感じる事ができた。特に9月に入って突然に風が変わって秋の到来を知る。その話を皆実高の後輩の為末大君に話したら、「僕もよく比治山を走りました」と相づちを打つ

てくれた。世界的ハードラーも比治山とともに育ったのだ。

私が皆実高生であった頃の1960年代前半には、学窓から比治山を望むことができた。秋の紅葉は、国語で習ったばかりのヴェルレーヌの詩「秋の日のヴィオロンのため息の身にしみてひたぶるに「うらがなし」をほうふつとさせたものだ。

（東京皆実有朋会会長＝東京都）

緑地帯

広島を離れて47年。その間ずっと比治山は私の故郷であり続けた。これからも変わることはない。今日の「国際平和文化都市」広島は姿はこま送りの映像のように鮮烈でもあり、また一方で少なからぬ閉塞感を感じてもある。

クラシック音楽が趣味の私は、ベートーベンの連作歌曲集「遙かなる恋人へ」を聴くとき、若かりし頃、比治山の天狗岩に座った時

岡村 有人

のことを重ねてしまう。この歌の主人公の若者は丘に座してそこから見える山、谷、空、雲、花、そして西風に託して愛をうたう。かつて訪ねたドイツのボン郊外のリゾート地・ケーニツヒスヴィンターから見下ろしたライン川とボンの街に同様なものを感じた。

最近訪ねたフィレンツェの丘から見渡せる花の街にも、サンタンジェロ城の屋上から見たローマの

私の比治山⑧

街にも、静かに息づく時の流れを感じた。もはや比治山の展望台に立つてこのような思いに浸ることは無理ではあるが、「平和の丘」構想にいちろの望みを託したい。

最近広島駅に降り立ってまず感じることは、海外からの旅行者が増えたことだ。健全な経済の発展は都市機能の根幹をなすものであるが、それに加えて広島には大切なミッションがある。

広島はもはや広島市民だけのものではない。この地を訪れる世界の人々を優しく包んで平和への思いを共有する、そんな役割を担っている。世界的に内向きのナショナリズムが台頭する今日、広島が果たすことのできる役割は大きいことを忘れてはなるまい。東京五輪を明年に控えてそう思う。

（東京皆実有朋会会長＝東京都）

＝おわり